

源氏物語の独詠歌 試論

— 光源氏を中心として —

一

源氏物語の和歌は独詠歌・贈答歌・会合（唱和）歌の三分類として一応の整理がなされている。^①そしてまた、いかなる種類に分類された歌においても、それぞれの歌には歌い出された歌の向かう対象があるのではないだろうか。言いかえれば、和歌そのものが詠出されるという時点、ないしはもっと敷衍して、意をついで出るものすべてが本来的にもっている内質として、少なからず、その言葉あるいは意向のむかかっていく方向性がそなわっているのではないかということがある。贈答歌や唱和歌においては自明の対象がある。しかし独詠歌という分類においては鈴木日出男氏の整理をそのまま引いてみても「心遣りの独吟や手習歌のように、他者への通達の意図がまったくない場合」^②ということになっており、すなわち他者のな

いことが、まさに独詠歌の独詠たる所以であることなのである。たしかに独詠歌と分類される歌には、他者なり、また相手の存在はみられないのである。もっともそれが基軸なのであるから当然のことである。鈴木日出男氏のこの説明は「通達機能」による分類ということであり、「通達」に力点を置いた分類からは当然のことといえる。鈴木一男氏においての独詠歌分類の説明はこうである。「心中思惟の歌はもちろん、ひとりごと、すさび書きなど、純粹に自己の心情の独白であり、他に、その受けとめ手のいないもの」^③とあり、歌の「受けとめ手」においてひとつの判断があることはかわりがない。小町谷照彦氏は同じ独詠歌について次のように説明している。

独詠歌は応答を伴わない一方的な心情の発散で、苦悩や心的葛藤、思慕や願望などが表現されることによって、逼迫感や解放感もたらされる。物語の独詠歌は登場人物の内面描写の方法の一

久保田 孝 夫

つとして、贈答歌とは異なった形で、作品世界の形式に大きくかわっている。独詠歌は贈答歌よりも量的には遙かに少ないが、登場人物の直面している状況が何らかの閉塞性を示している場合に多く見られ、質的には遜色がない。^④

と説明されるように、独詠歌は「一方的な心情の発散」なのであって、その発散のむかう方向はいずれともなく、しかし、確かに向かっていくのである。

夕霧巻。雲居雁との仲を不安定にしている夕霧が、その原因である亡き柏木の妻落葉宮の小野山荘を訪ねての帰り、一条御息所と柏木・落葉宮がかつて住まいしていた一条宮の荒廃を見て詠む独詠歌、

見し人のかげすみはてぬ池水にひとり宿るも秋の夜の月
と独りごちつつ、殿におはしましても、月を見つつ、心は空にあくがれたまへり。
(四・438)

は、あきらかに独詠歌である。小野の地で亡くなった一条御息所の死を思ふ夕霧にとって、一条宮は△見し人の影住み果てぬ▽地であった。この地に住み続けることができずに死んだ人△柏木・一条御息所は、夕霧が「見し人」に相違ない。夕霧が△澄み果てぬ▽池水に求めたものは、確かに柏木と一条御息所の姿であったのかもしれない。しかしその今は亡き二人を対象になげかけた歌は、小野に一人残してきた落葉宮への思いを自らの心によぎらせるものでしかな

かった。いったんは、柏木と一条御息所に対象を据えた詠出は、その二人に届くすべもなく夕霧自身の思う心に宿る落葉宮へと回帰現象を示してしまう。その落葉宮も今は一人この秋と月と同じように、小野でその身一人で過ごしていることを夕霧は思いおこさずにはいられなかったはずである。そんな夕霧の「月を見つつ、心は空にあくがれたまへり。」という様子は、自邸の女房達の叱責をかう以外の何ものでもなかったのである。

独詠歌の対象が亡き人であったとき、歌の意向はその対象をすりぬけて、詠出者の心中の翳りへと迂回して舞戻ってくる。

紅葉賀巻。の光源氏の独詠歌。

尽きもせぬ心のやみにくるかな雲るに人を見るにつけても
とのみ、独りごたれつつ、ものいとあはれなり。

中宮となった藤壺、または子(冷泉院)は光源氏の「心のやみ」であり心の翳りの部分であった。歌い出す対象へ方向はやにわに自らの心中深くへ押し沈められる。

二一

桐壺巻での更衣の、
かぎりとして別るる道の悲しきにかまほしきは命なりけり^⑤

(一、99)

は、その場に居あわせている桐壺帝が「ともかくもならむを御覧じはてむ、と思しめすに」と、この更衣から向けられた歌に対して、とりあらずすべすら失っている。受け答えることを捨象されたかにみえるこの歌は、少なからずこの場面ではあくまでも独詠歌に近い。

しかし、この更衣のたゆたう意向は、ようようにしてしかるべき桐壺帝に受けとめられたのであった。

たづねゆくまほるしもがなつてにても魂のありかをそこ知る

へく

(一、111)

この桐壺帝の歌があつてこそ更衣の歌の意は物語に定着したのであり、和歌のルールにかなった一対の唱和歌になり得たのである。^⑥

桐壺帝は更衣にとつて、その歌を詠出した場に居た \wedge 他者 \vee であつたに違いない。しかしこの \wedge 他者 \vee に届くまで、更衣の歌は独詠歌でしかなかつたのである。

いまここで、あえて歌をかわす場の \wedge 他者 \vee とはいわず \wedge 相手 \vee といいなおすなら、まさに独詠歌においてはその \wedge 相手 \vee こそ \wedge 自分 \vee 自身であつたのだ。自らの歌い出した歌の世界は、そのまま自身の心奥深くに逆につきささってくるのである。桐壺更衣の意はずくとられず葬送の時間の中に解消されていきそうになるのである。「一方的な心情の発散」は受けとめ手がなければ、そのままたゆたつて詠出者自身の内に逆に向けられてくる。そしてそのことは、

自分自身がその心情を確認してしまふことになるのであり、つまりは自己客観化してしまつている様をわれわれ読者にみとらせてしまふのである。

独詠歌では、歌いかける \wedge 他者 \vee が設定されていないにしても、その歌の意向が向けられていく対象は認められる。そしてその多くが、詠出者自身の内へと内化させられていく方向性を示しているといえよう。

しかし、この桐壺帝の「たづねゆく」の歌は、すでに答えてやべき対象である桐壺更衣を失つてのものであった。更衣の魂のありかを訪ねていく幻術師の存在を「もがな」と求めても、それは『長恨歌』の世界のものでしかなかつたという孤絶感が漂う。桐壺更衣を対象にした帝の答歌はやはり「一方的な心情の発散」でしかなかつた。この歌は帝の心奥に更衣の姿と揚貴妃とを重ねあわせるまでしかできないことを、帝自身に確認させていく \wedge 鎮魂 \vee の独詠歌になつていたのである。^⑦

桐壺帝から詠出された歌は、届ける先のないままに帝自身へ戻つてきた。そして、この歌に続けて桐壺帝はもうひとつの独詠をする。たたみかけるように帝の二つの独詠歌が並ぶのである。

雲のうへもなみだにくるる秋の月いかですらむん浅茅生のやど

(一・112)

ここでの上の句「なみだにくるる」は前の歌と同様に、亡き更衣への八鎮魂であるが、更衣へと向けられた銚先は下の句になって、更衣の母北の方と光源氏のいる浅茅生の宿に転換してくるのである。まちがいなく光源氏を物語の表舞台に引き出してこようという意図は見えてくる。この歌のあとに長恨歌世界の引用を少しくおこなって、その世界が消えるや否や、若宮（光源氏）の参内となる。「雲のうへも」の帝の歌は、方向を更衣へ向けた鎮魂でありながらも、かねてから靉負命婦をつかわせて働きかけてきた若宮の参内を望む自らの肉声へとかわったのである。更衣へと向けられた独詠と、若宮（光源氏）へとなげかけられた独詠。この二重の独詠歌の重みによって、それまでの長恨歌が背後に敷きつめられていた世界を収束させ、新たな世界をつむぎ出していくのである。

最初に光源氏が二重の独詠歌をおこなうのは葵上の死の直前まで待たねばならない。葵巻は桐壺帝の退位、葵祭の車争い、そしてそこから引き起こされる葵上の死。物語が大きくうねりながら流れていく巻のひとつである。

のほりぬる煙はそれと分かねどもなべて雲のあはれなるかな
(二・42)

そして、場所を左大臣邸に移しても光源氏の独詠は続けられた。

限りあれば薄墨、ころもあさきけれど涙ぞそでをふちとなしける

源氏物語の独詠歌 試論

このどちらもが、対象を亡き葵上にむけた光源氏の独詠歌となっている。彼の嘆きはそのまま「涙ぞそでをふちとなしける」と我が身の悲しみとしてぬり込められていく。そんな中でも物語は胎動を予兆させている。

若宮を見たてまつりたまふにも、「何に忍ぶの」と、いとど露
かけれど、かかる形見さへなからましかば、と思し慰さむ。
(二・43)

光源氏は自分の涙を慰さめる対象として、若宮（夕霧）を見つめて
いる。この若宮の描写は物語を動かす可能性を十分もっていた。

しかし光源氏の独詠は、この巻のここだけにとどまるものではなく、むしろ後置されている方の二重の独詠にこそ駆動力があることを表現としてとっている。

「旧き枕故き衾、誰と共にか」とある所に

亡き魂ぞいとど悲しき寝し床のあくがれがたき心ならひに

また、「霜華白し」とある所に、

君なくて塵積りぬるとこなつの露うち払ひいく夜寝ぬらむ

一日の花なるべし、枯れてまじれり。
(二・58)

ここにも『長恨歌』の面影は色濃く落とされている。その上に、「
とこなつ』」「夕霧」の姿もほの見えているといえよう。^⑧

光源氏から葵上への歌の呪力はとどかない。そして自らに戻された葵上への思いは、敢え無く「いく夜寝るらむ」という自照へと回帰してきたのである。光源氏の葵上に対する鎮魂は終りを告げようとしている。物語のこの二重の独詠歌によって、光源氏を葵上の呪縛からみごとに解き放った。そしてもしも、桐壺巻と同様のかたちをとったならば、夕霧を据えた物語が用意されてしかるべきであったかもしれない。しかし、そうではなかった。桐壺巻ではこの源氏物語始発以前の部分はもうとうとう描かれていなかった。その意味では桐壺巻における物語の展開は一直線である。だが、葵巻まで来たとき、物語はそれ以前に描かれた世界を全て負っている。若紫の登場から葵上への伸長―新枕、まさに妻のすげ替えをやつてのけた。紫上との新枕までをつなぎとめたのは葵上に対する悲哀が基調に流れている。光源氏を囲む局面は明確に変わってくる。二重の独詠はそれまでの世界をくくりとめてしまつて、新たな世界を切り開くのである。

次に、光源氏の独詠歌が重ねられているところは須磨の巻である。須磨へ旅立つ光源氏とそれを送る紫上の贈答歌がその前に用意されていた。「わが身かくてはかなき世を別れなば」という彼の配慮を伴つて、

生ける世の別れを知らで契りつつ命を人にかぎりけるかな

という光源氏の贈答に答えて、葵上の返しは、

惜しからぬ命にかえて目の前の別れをしばしとどめてしかな

(二・178)

そして須磨へ向かう道すがらの光源氏の二重の独詠歌である。

大江殿と言ひける所は、いたう荒れて、松ばかりぞしるしなる。

唐国に名を残しける人よりも行く方しられぬ家ゐをやせむ

(二・178)

……うちかへりみたまへるに、来し方の山は霞遙かにて、まことに三千里の外の心地するに、權の雫もたへがたし。

ふる里を峰の霞はへだつれどながむる空はおなじ雲ぬか

つらからぬものなくなむ。

とある、舟路の權の雫はいつまでも止めどなく流れる光源氏の涙の多さであり、また、そのことは都を遙か離れた舟上からの視角的な空間の広がりとなつて重なっている。歌世界の空間の広がり、時間の経過を意味して、光源氏を須磨の地へいざなうのである。

この二つ続けられた独詠歌が終れば、到着した須磨の描写が広げられている。

「大江殿」の通過を指示してからは、あと須磨までの時間の経過をこの二首の独詠歌が支えている。「歌と歌枕による道行き」^⑥であ

り、借り受けた背景は『楚辞』と『白氏文集』そして『伊勢物語』であった。

「唐国に」の歌では「行く方しられぬ」西の地に、その思いは投げ出されている。一方「ふる里を」の歌では、光源氏自身の「ふる里」である都を思うこと（残された紫上たちを含めて）が述べられる。自らを基点に前の歌では須磨までの距離を、また後の歌で都から離れてきたそこまでの距離を測る。都から須磨までの全ての距離が示されているよう。それは逆に我が身の遠ざかっていくことを彼が確認すること以外のなにもでもなかった。ここで都の地は、はるか遠くのものとして切り取られてしまい、その距離と時間のへだたりをこの二首の独詠の深さで測っている。

須磨巻でこのあとに置かれてある、二首続きの独詠歌を掲げておこう。別れてきた藤壺と朱雀帝を思っておこながらの独詠二首。

見るほどぞしばしなぐさむめぐりあはん月の都は遙かなれども

(二・194)

うしとのみひとへにものはおもほえでひだりみぎにもぬるる袖

かな (二・195)

最初のは賢木の巻の藤壺の歌との呼応関係は指摘されているところであり藤壺に向かう方向性を示している。また二首目の歌は朱雀院への方向を示したものであった。この独詠歌の次には、あらたな

人物である上京途上の大宰大貳が登場しての場面へと変換し表現をつなげている。そして、もうひとつ、独詠歌のかさねあわされた場面は、明石上との接近が促される直前に置かれた光源氏のひとりごとの世界である。

いづかたの雲路にわれもまよひなむ月の見るらむこともはづかし (二・200)

友千鳥もろ声に鳴くあかつきはひとり寝ざめの床もたのものし (二・200)

「ただ是れ西に行くなり」とひとりごとをしてのはじめの歌は、『菅家後集』を引きながら、散文と歌との意志疎通の上になりたつて明石の地を指し示してはいないだろうか。そしてまた、「寝ざめの床」の「友千鳥」には、明石上の姿がおぼろげに見えてこよう。

三

これら以外に須磨の巻で詠出される光源氏の独詠歌は多い。この巻での独詠歌について小町谷氏は「源氏の逆境と孤絶とを示し、源氏周辺にのみ限定されて手詰りになった物語の進行を持続させる役割を果たしているのである。」とする散文との連関の上に立つ機能論は賛成である。そしてまた、「独詠が二首ある場合はいずれも性格の異なった歌によって変化をつけるようにしているのである。桐

壺や幻にも見られるが、漢詩文的発想の歌が感壞の表現に視角を変えた効果をもたらしていることは注目してよい^⑩。ただ、ことわっておかねばならないことは、本稿でいう二重の独詠歌とは、単に独詠歌が二首並んでいる場合を指しているのではない。引用してきたように、一人の人物が時間と場所とを隔てないひとつの場面で、二首の独詠をおこなうことを意味している。興味深いことは、この条件を満たすとき三首、四首と独詠歌が一人の人物によって続けられることはないということである。全て二首までで閉じられている。小町谷氏のいわれる「独詠が二首ある場合」とは、同様の条件を備えているかどうかははっきりしないが、「性格の異なった歌によって変化をつける」ということは歌の質の問題のようにも受け取れる。本稿に引きつけた立論が許されるなら、性格の違いは歌のむかかっていく方向、歌意の方向の違いとして指摘できよう。そしてそれが二重に独詠されるとき、場面の収束状況をつくり出していくのだと。須磨巻にあとひとつ残る二重の独詠歌。それは巻の最後に暴風雨を引きおこした祓につづく独詠歌であった。

知らざりし大海の原に流れきてひとかたにやはものは悲しき

(二・209)

八百よろづ神もあはれと思ふらむ犯せる罪のそれとなければ

(二・209)

はじめの歌の対象は、陰陽師の海に流した「人形」であるが、その「人形」からの返答はあろうはずがない。そのまま光源氏の「もの悲しき」心の内へもどってきている。全ての独詠にこの関係を説明する必要はもうないだろうが、「八百よろづ神も」の歌は、まさに「神」にその訴えをおこない、罪の問題を再度自己に向けているという様子である。この後置されている歌の神にさいなまれたかのように暴風雨がおこって場面は暗転する。物語は明確に区切られたのである。

独詠歌が一首だけ置かれてある場合と、二首続けられている場合の相違を、本質的に解きほぐす鍵はいったい何なのであろうか。

益田勝実氏に注目しなければならぬ論がある。

『源氏物語』の歌は数が多い。従って、一樣に考えることはできないが、概していえば、それは主として贈答歌であり、贈答歌の大部分は、慣習化された生活儀礼的な、けのことばでない日常の会話で、それが作者によって、素材以上のものとして用いられる可能性をふくみながらも、ほとんどの場合、実際にそうあった物語の人々の日常の瑣事になりきってしまった。独詠こそは、そういう歌の位置からおりて、けのことばでないことはとその個有のしくみで、登場人物の叙情を展開する任務を持っていながらも、それが贈答歌と自己を峻別する個有の方法を内蔵していない

ため、叙情が日常をつき破つて築き上げる歌の世界が、そのまま贈答歌の日常的世界と同価でしかなくなるところに、大きな矛盾があった。^①

と指摘されるように、独詠歌は日常の世界に埋没していることは否定できない部分がある。しかし、贈答歌が日常的な時空にとどまらず、その本来の姿であるハハレVを保っていないこと、否、むしろそこからひきずり落としてくること、それは日常的な時空というよりも物語というレベルでの時空に定位することになっているのではないだろうか。むしろ、ハハレVの場を保つ歌の世界には何の未練も頓着もないかのようでもある。「歌自体の表現力というよりも、歌にどのようにいわせようかという、散文との呼応というのが非常に問題」であり、そこに力点があるといつてよいのだろう。

二重の独詠をおこなう人物は、光源氏の他にも、柏木、薫、落葉宮、浮舟などがある。これらの歌についてもふれおかねばならないところであるが、今は別の機会にゆずりたい。終りに光源氏の独詠で、歌の多い巻の代表でもある幻巻の例を引いておこう。

植ゑて見し花のあるじもなき宿に知らず顔にて来るるうぐひす

(四・514)

今はとてあらしやはてん亡き人の心とどめし春のかきねを

(四・516)

これを最初の一对にして、次が時間による展開のあきらかな夏の場面での歌

つれづれとわが泣きくらす夏の日をかごとがましき虫の声かな

(四・528)

夜と知るほたると見てもかなしきは時ぞともなき思ひなりけり

(四・528)

そして、もう一对が、

死出の山越えにし人をしたふとて跡を見つつもなほまどふかな

(四・533)

かきつめて見るもかなしもほ草おなじ雲ゐの煙とをなれ

(四・534)

この歌の前と後では光源氏の精神の昇化の構造があると指摘したのは小町谷氏であった。^②まさにこの二つの歌の志向している歌の意志は対立していよう。地上にまどう光源氏自身が、次には雲井の煙を見つめているのである。

四

「散文的な決意が実利的にはたらくものならばうたはいらない」のであろう。だが、多くの歌が織りこまれたとしても、源氏物語の叙事的な部分はいささかもゆらくことはないし、いかに表現効果を

あげようとしてもおのずから限界があり、抒情に流されることはきびしく避けているのである。^⑮

たしかに歌は、散文ではいいつくすことが不可能と思える深い呼びかけを対象になげかける。そして、歌は散文の中で贈答という本来的な和歌形式として同化していつているようにあたかも見えるが、この同化は一方の極である散文によって異化されてもいる。贈答・唱和・独詠歌をもって散文世界にすべり込んできた和歌的世界は、自然なかたちとして、物語の人と人との関係を心情の連繫というふち取りのもと位置付けてきた。しかしその歌にかこつけられた世界をきびしくつき離すのは、二重にかさねあわされた独詠歌である。歌の向かうべき対象を隔絶した所に求める独詠歌は、作用をおこせなくなつた詠出者自身が、その歌の意向を受けとめてしまうという反働作用をくりかえすのである。この二重の独詠歌は、歌という抒情をもつてつくりあげてきた抒情的物語部分ときびしく対峙しそれまでの物語世界を統括して散文世界を切り開いていくのである。

① 最初に三分類比したのは森岡常夫氏「源氏物語の和歌」雄山閣『日本文学論大系』六、後に『源氏物語の研究』所収であった。その後、鈴木一雄氏編「源氏物語の文章」（解釈と鑑賞、昭和44年6月）、また、小学館「日本古典文学全集」『源氏物語』六に附載されている。鈴木日出男氏編「源氏物語作中和歌一覽」等においても基本的にはこの分類が基礎になっている。

② 注①参照。

③ 注①参照。

④ 小町谷照彦氏「歌—独詠と贈答」『国文学』昭和47年12月。

⑤ 源氏物語の本文は以下小学館『日本古典文学全集』による。また（巻数・頁数）を示す。

⑥ 藤井貞和氏「光源氏物語の端緒の成立」『源氏物語の始原と現在—定本』所収。

⑦ 注⑥に同じ。

⑧ 拙稿「光源氏物語の長恨歌引用の表現」南波浩氏編『王朝物語とその周辺』所収においてすでに述べた部分がある。

⑨ 玉上琢彌氏「源氏物語評釈」。

⑩ 小町谷照彦氏「源氏物語の和歌」、有精堂『源氏物語講座』第一巻所収。

⑪ 益田勝実氏「和歌と生活」、解釈と鑑賞昭和34年4月。

⑫ 国文学、昭和55年5月号の対談での鈴木日出男氏の発言。

⑬ 小町谷照彦氏「『幻』の方法についての試論」、日本文学、昭和40年6月。

⑭ 藤井貞和氏「うたの挫折」『源氏物語及び以後の物語研究と資料』古代文学論叢第七輯』所収。

⑮ 鈴木一男氏「源氏物語の和歌」『国文学』13巻6号。